

研究発表

挿詩文の系譜

—日本文学史試論—

Tracing the lineage of *sōshibun*:
an essay in the history of Japanese Literature

古田島 洋 介*

In a number of the acknowledged masterpieces of Japanese literature, such as *Ise monogatari*, *Genji monogatari*, and *Oku no hosomichi*, we find a curiously consistent mode of expression: every work is composed of prose and verse (*waka* or *haiku*). The verse is inserted in the prose. If we call this mode *sōshibun* (挿, 'insert,' 詩, 'poem,' and 文, 'prose'), a good many Japanese literary works of major importance may be designated by a single term. Thus, *sōshibun* can be regarded as a constant presence in Japanese literature. By considering its ups and downs, in quality and quantity of production, we can clarify one of the central characteristics of the Japanese literary tradition. My tentative outline:

EARLY PERIOD { 712 *Kojiki* 古事記
 |
 ?900 *Ise monogatari* 伊勢物語

* KOTAJIMA, Yōsuke. 東京大学博士課程

FLOWERING	{	?900	<i>Ise monogatari</i> 伊勢物語
STAGNATION AND POPULARIZATION	{	1223	<i>Kaidōki</i> 海道記
RESTORATION	{	1686	<i>Nozarashi-kikō</i> 野ざらし紀行
DECLINE	{	1820	<i>Ora ga haru</i> おらが春
	{		(Personal attempt at revival on the part of Nagai Kafū, early twentieth century)

Paul Valéry once compared prose to walking and poetry to dancing. In *sōshibun* as well, to be sure, prose can be likened to walking, but poetry in this mode is not so much dance as a symbolic posture, much like the *mie*, a pose struck and held at climactic moments in Kabuki plays. Furthermore, the relationship of verse to prose in *sōshibun* can be described in functional terms as one of *misogi*, or “ritual purification.”

一般に著されている日本文学史を読んでいると、1点、どうしても気にかかることがある。それは、上代・中古・中世・近世・近代という時代区分がさしたる疑問なく踏襲せられていることである。この区分に従えば、必然、

日本文学史上に4つの大きな転換点があったことになろう。宮廷貴族政治の成立、武家政治への移行、町人階級の勃興、近代市民社会への変革。なるほど、文学が社会情勢の変遷と深いかかわりを持っている以上、これらの政治的・経済的転換の投影を文学の流れの上にも認めることができよう。が、密接な関係、必ずしも従属の謂ではあるまい。果して本当に日本文学に四度もの大変革期があったのだろうか。

ただちに答を書きつけておく。否、と。日本の文学作品を時代を追って読み進めてみても、日本人の物の考え方や感じ方、すなわち思考法や感受性が4度も多大な変化をこうむったとはどうしても思えないのである。

これは、少々考えてみれば至極当り前のことかも知れない。なぜなら、日本文学は、他でもない、同一の国土において、他民族に一度も征服されることなく、単一の民族として生活を営んできた日本人の文学だからである。断絶・転換の相よりもむしろ連続・不変の相が目立つのが当然ではなからうか。事実、『古今集』や『源氏物語』はさまざまな注釈をほどこされつつ、最高の範例として保存され尊敬され続けてきた。明治以後とてその例外ではあるまい。とりわけ『源氏』については与謝野源氏、谷崎源氏、円地源氏等々。そして巷間にあふれる源氏ファン。一体、日本文学史上、『源氏』の文学的価値を真向から否定する論を表明した者が何人いたであろうか。

少しく考えてみただけでも、一般に行われている日本文学史の5時代区分法は、日本文学の実相よりは政治経済の動きに歩調を合わせた便宜的な方法という結論は避けられないだろう。すなわち、当事者たる文学の側から言えば、いささか眉唾物ということだ。

では、日本文学史の時代区分、ひいてはその全体像はいかに構想されるべきか。

上に述べた通り、日本文学の流れを虚心坦懐にながめてみると、断絶・転換の相よりは連続・不変の相が目につく。となれば、作家論を調味料とし、作品論を手短かにまとめて時代順・ジャンル別に羅列するという従来の日本

文学史記述の常套手段よりは、何らかの基軸を設定し、それを中心に日本文学の展開を考察するという方式の方が実相にかなっていることは明らかだろう。問題は、その基軸をどこに、どのようにして求めるかということである。

まず、基軸と言う以上は、日本文学の中心部にそれを求めねばなるまい。一体、日本文学の中心部とは何か。和歌か物語か。あるいは詩か小説か。非ず、傑作である。有象無象の駄作の首を刎ねて、傑作と称される一流の作品を対象として基軸を設定せねば意味があるまい。2流以下の品々の面倒はそれからのことである。藪に踏み惑うのは知恵者の為すべき業ではなからう。

それでは、日本文学の二大黄金期と目される平安王朝文学と江戸市井文学、その最高傑作たる『源氏物語』と『おくのほそ道』、この作品を貫く一本の基軸は何か。

ここで問題の第2が生ずる。基軸をどのようにして求めるかということである。

『源氏』と『ほそ道』から「あはれ」を共通の要素として取り出すことは可能だろう。そしてそれを「あはれ・幽玄・さび」という流れに置きなおして日本文学の基軸とすることも許されるであろう。が、このような観念はあまりに日本人的すぎはしまいか。いわば仲間うちの符牒のごとくであり、暗黙の了解部分が前提となっているような印象を拭い切れないのである。「あはれ」に限らず、抽象的な観念を基軸に据えようとする、多かれ少なかれ主観的な色彩が濃くなり、曖昧で内向的な仕儀に陥ってしまう。これは『源氏』『ほそ道』が何を表現しているか(What)にばかり目を向けたゆえの結果ではなからうか。むしろどのように表現しているか(How)に注目せねばならぬ。つまり、表現内容よりも表現形式にその共通の特徴を求める方が客観性を持ち得るであろう。

では、『源氏』と『ほそ道』の形式上の共通点は何か。瞥見、人皆ただちに知るであろう、詩(和歌・発句)が散文の間に挿入されていることである、と。仮にこの表現形式を、詩を挿入している文章という意味合いから挿詩

文〉と名づけるとすればどうか。然り、たちまち多くの作品がその名の^{もと}下に包摂せしめられるであろう。『伊勢物語』『蜻蛉日記』などをはじめとする平安期の物語類や日記類、鎌倉・室町期の日記や紀行文、そして江戸期の俳文なども、そのほとんどが〈挿詩文〉である。御伽草子にも和歌の挿入が散見される。歌物語・歌日記などという概念がそもそも〈挿詩文〉の^{まは}りにすぎない。遡って『万葉集』巻十六「有由縁并雑歌」も一変種として見做せよう。

すなわち、ここに提唱する〈挿詩文〉とは、散文中に詩を挿入して文芸効果を高からしめようとする表現形式、およびその表現形式によって綴られた文章の義である。ここに言う詩とは、定型詩・自由詩など一切の韻文・律文の類を包摂する概念であり、長歌・短歌（和歌）・連歌・俳句（発句）・漢詩・近代詩などを含むことはもちろん、西詩およびその訳詩をも範疇に数える、きわめて広義の詩である。散文については、ごく常識的に詩以外の普通の記事を指すものと了解していただければよろしい。また、挿入とは、文中への挟み込みのみならず、文頭あるいは文末に詩を置くことをも意味する。つまりその場合は、詩の前や後に散文の空集合があるものと見做して挿入と呼ぶわけである。右に掲げた作品の量、およびその水準を見ても、〈挿詩文〉が優に日本文学史の一基軸たり得ることは十分納得できるであろう。

が、単なる文学史の一基軸にとどまらず、〈挿詩文〉には、日本文学の独自性を映し出す可能性が秘められていると思われる。なぜなら、例えばヨーロッパには〈挿詩文〉を基軸として持つような文学的伝統のある国が全く見出だされないからである。だいいち、〈挿詩文〉自体が、Chantefable と呼ばれるフランス中世の物語やその他の少数の作品を除いて、ほとんど皆無に等しいと言えよう。むしろ私は、これを以て、日本文学がヨーロッパ文学よりも秀れているとか、逆に、詩と散文が未分化な日本文学の後進性とかを言い立てようというのではない。ただ、日本文学が〈挿詩文〉を基軸とする文学史構築の可能性を持つほとんど唯一の文学である以上、これを看過忘却する手はないと言いたいのである。

もっとも、今私が用いた「ほとんど唯一」という曖昧な言い方に引っかかりを覚える向きがあるかも知れぬ。だが、これは臆した遁辞ではない。中国文学におびたしい〈挿詩文〉が存在することを承知しているがためである。『史記』項羽本紀のいわゆる四面楚歌の件り、唐代の伝奇小説、『伊勢物語』に影響を及ぼしたと推される孟榮の『本事詩』（886年か）、および4大奇書をはじめとする章回小説などは、すべて紛れもない〈挿詩文〉である。したがって、〈挿詩文〉を以てただちに日本文学の独自性を言い出すのでは、いささか早計の感を免れないであろう。

しかし、それでもなお、私は〈挿詩文〉に日本文学の独自性を見出すことができるかと主張したい。というのも、日本文学成立と同時に〈挿詩文〉が存在したという事実に注目するからである。『古事記』を見よ。既に〈挿詩文〉である。そしてこの『古事記』から初の短篇挿詩文集『伊勢物語』の成立までわずか約2百年。これに対し、先秦期の中国文学には〈挿詩文〉らしい〈挿詩文〉は見当らず、先に掲げた『史記』から同じく短篇挿詩文集『本事詩』までの道程は約千年に及ぶ。この長さをも考え合わせれば、〈挿詩文〉が日本文学独自の特徴たり得ることが切実に感じられはしないだろうか。もちろん、日本文学が華華しい〈挿詩文〉の伝統を築くにあたって中国文学の恩恵をこうむった可能性は高く、先ほどのヨーロッパ文学における場合と同様、日本文学が中国文学に優越するなどという言辞を弄せんとするのではない。ただ私は冷静に、日本文学が〈挿詩文〉によって出発し、わずかの間に『伊勢物語』という〈挿詩文〉の秀作を生み、その後輝かしい伝統を築いて行った事実^いに驚きの目を見張りたいのである。冷静に驚くとは矛盾の謂か。非ず。文学研究の骨法に他なるまい。

さて、では〈挿詩文〉を基軸に据えた場合、果して日本文学史はいかなる様相を呈するだろうか。ここでただちに試案を示せば次の通りである。

創始期 = 8世紀初～10世紀初

『古事記』から『伊勢物語』前まで。長歌挿詩文・和歌挿詩文など。
隆盛期＝10世紀初～13世紀初

『伊勢物語』から『海道記』前まで。和歌挿詩文の全盛・成熟。挿詩文
の中心ジャンルは物語・日記。

沈滞（普及）期＝13世紀初～17世紀末

『海道記』から『野ざらし紀行』前まで。和歌挿詩文・連歌挿詩文など
多彩。挿詩文の中心ジャンルは紀行・御伽草子。

中興期＝17世紀末～19世紀初

『野ざらし紀行』から『おらが春』まで。発句挿詩文の全盛。挿詩文の
中心ジャンルは紀行・俳文。

衰微期＝19世紀初～？

★永井荷風による個人的再興＝20世紀前半。西詩挿詩文・文語自由詩挿
詩文など多彩。挿詩文の中心ジャンルは小説・随筆。

文学以外の要素をすべて排斥した、日本文学史の大きな見取り図である。
時代区分、およびその目安となる作品の選び方など、果して御賛同をいただ
けるだろうか。

なお、第3番目の時代名を「沈滞（普及）期」としたのは、作品の量の面
からは「普及期」であると認めつつも、質の面からは「沈滞期」であると考
えるがためである。

さて、〈挿詩文〉という表現形式の持つ文芸効果について考えた場合、挿入
された詩が直前の散文に対してどのような関係にあるかが最も重要であると思
われる。未だ試案の域を出ていないが、以下に4つの型を記しておくこと
としよう。

第一は累加型である。下に『伊勢物語』4段の一部を掲げる。

又の年のむ月に、むめの花ざかりに、去年を戀ひて行きて、立ちて見、
るて見見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷

に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

散文の情緒のうねりを、詩（和歌）が「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」という重疊的表現によってさらに高めていると言えよう。このような型の〈挿詩文〉を、散文の情念が詩によって一層の厚みを増しているという意味合いから、累加型と呼ぶわけである。

第二は凝縮型である。『源氏物語』幻巻（当該作品中、最も〈挿詩文〉らしい巻である）の一節を引く。

いと暑きころ、涼しきかたにて、ながめ給ふに、池の蓮のさかりなるを、見給ふに、「いかに多かる」など、まづ思し出でらるゝに、ほればれしくて、つくづくとおはする程に、日も暮れにけり。ひぐらしの聲、はなやかなるに、お前の撫子の夕ばえを、ひとり見給へば、げにぞ、かひなかりける。

つれづれとわが泣き暮らす夏の日を

かごとがましき蟲の聲かな

和歌は、散文の要素をほとんどそのまま取り来って三十一文字にまとめたものである。このような型の〈挿詩文〉を、詩が直前の散文を集約しているという意味合いから、凝縮型と名づけるわけである。もちろん、発句を挿入詩とする凝縮型もある。『おくのほそ道』から笠島の条を録す。

此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過るに、簀輪・笠嶋も五月雨の折にふれたりと、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

そして、発句による凝縮型の方が、和歌による凝縮型よりも、さらに鮮明な凝縮効果を発揮するであろう。言うまでもなく、発句は和歌を上回る超短詩型だからである。凝縮型は、発句を挿入詩とすることによって、新たな息吹きを得たと考えることが許されよう。

第三は止揚型である。『源氏』幻巻から、明石上の歌を直前の散文とともに掲げる。

よべの御有様は、うらめしげなりしかど、いと、かく、あらぬさまに
思しほれたる御氣色の、心ぐるしさに、身の上はさしおかれて、涙ぐま
れ給ふ。

雁がゐし苗代水の絶えしより

うつりし花の影をだに見ず

散文に述べられた明石上の心情と、和歌に託された明石上の心情との間に
逕庭が存することは否定し難いではなからうか。「身の上はさしおかれて」
とはいうものの、歌では寵愛の薄れた孤閨の悲しみを歌っているからである。
歌の直前に、「しかし、それでもやはり、源氏の愛情が遠のいた我が身を嘆く
気持は消しがたかったのであろうか」という意味の一文を補わなければ、散
文と歌とはなめらかに続かない。ここに〈挿詩文〉の高度な達成を見る。明
石上にとっては、散文に述べられているような、自身をさしおいて源氏をい
たわしく思う気持も、歌に見られるような、寵愛の薄れたことを恨めしく思
う気持も、どちらも真実だったのであろう。この容易に矛盾すべき感情が、
散文と歌とに分ち持たれて一処に叙せられいるのである。読み手はここで何
分かの衝撃を受けざるを得まい。散文の内容と歌の内容との齟齬である。が、
その矛盾が破綻として意識されず、むしろ明石上の心の葛藤の反映として訴
えてくるのは、ひとえに、散文と歌という形式間の落差がそのまま緩衝地帯
として作用し、読者が受ける衝撃をやわらげているがためなのである。つま
り、内容の矛盾が形式によって克服されていると言えよう。ここに、〈挿詩文〉
という表現形式の特つ威力が遺憾なく発揮されているさまを看取することが
できる。このような型の〈挿詩文〉を、散文と詩がそれぞれに異なる心理を
描き、読み手にそのどちらをも含む、より高次の心理を伝えているという意
味合いから、止揚型と名づけるわけである。

第四は焦点抽出型である。『ほそ道』の名高い立石寺の件りを引く。

山形嶺に立石寺と云山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊清閑の地也。一見すべきよし、人々のすゝむるに依て、尾花沢よりとつて返し、其間七里ばかり也。日いまだ暮ず、桮の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重て山とし、松柏年旧、土石老て苔滑に、岩上の院々扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐり岩を這て仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ。

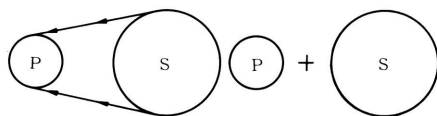
閑さや岩にしみ入蟬の聲

散文中で「清閑の地」「物の音きこえず」「寂寞として」と繰り返し強調されている静寂が、句の上五「閑さや」となり、散文には少しも現われていなかった、対照的な下五「蟬の聲」と取り合せられることにより、さらに鮮明に印象づけられていると言えよう。このような型の〈挿詩文〉を、散文の主眼を詩中に取り来って、一層の明確化を図っているという意味合いから、焦点抽出型と呼ぶわけである。

以上の四つの型を図示してみれば次のようになろう（散文＝S・詩＝P）。止揚型においては、SとPとを含む高次の心理の場、Rが読み手に伝えられることとなる。

〈凝縮型〉

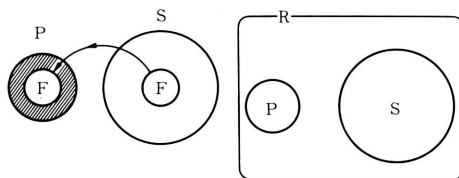
〈累加型〉



P=small S

〈焦点抽出型〉

〈止揚型〉



F=Focus

P=-S

ヴァレリーは、散文を歩行に、詩を舞踊に譬えた。なるほど、〈挿詩文〉においても散文は歩行であると言えるだろう。が、詩はどうか。舞踊と呼ぶよりも、むしろ散文の間に挿まり、立ち止まって見^み得^えを切ってみせていると言う方が適当ではあるまいか。そして、詩は、散文よりも折目正しい格式で象徴的に抒情性を発散することにより、いわば散文の^{みそぎ}禊の役割を果しているのである。

日本文学史を貫く〈挿詩文〉の系譜。それはまさに、日本文学を雄弁に語っているであろう。

* 文中の引用本文はすべて岩波日本古典文學大系本に係る。

* 昭和59年春に刊行予定の『比較文學研究』（東大比較文學會）45号に本稿と同題の論文が掲載される予定

討議要旨

キーン座長から、平安王朝文学と江戸市井文学を二大黄金期としているが、中世も、近代や現代も、また平安以前の万葉集も、それに劣らないのではないか、ジャンルに把われずに文学史を考えることには讚成だが、もっと思い切ってジャンルにこだわらず、謡曲や浄瑠璃のような「挿文詩」とでもいうべきものも含めて文学史を考えてよいのではないか、いずれにしても、散文と韻文をどのようにして区分するか、和歌や俳句のような形式でなければ散文なのか、など多くの疑問も持つが大へん刺激的で興味深い発表であったとコメントがあって討論にはいった。

臼田甚五郎氏から、明治初年研究者がはじめて文学史を考えようとした頃の原点に帰って研究しようという熱情を感じた。しかしここで創始期とされている8～10世紀は、「挿詩文」の創始期かも知れないが、文学史の創始期ではなく、それ以前の挿詩文の概念から漏れてしまうものがある。たとえば八

千矛の神と沼河比売の歌は、「事の語り事も是をば」と古事記に語り事として書かれ、歌と語りとが混在されている。またそれを受け継いだ謡曲や浄瑠璃のようなものが切り捨てられていると感じたがその点はどうかと質問があり、口承文芸は除外する前提で考えた、またこれだけで日本文学史全体を論じ切ったものではなく、一つの基軸として提起したと回答があり、それでは「挿史文の系譜」ということにとどめ、「日本文学史試論」という副題はない方が誤解がないのではないかとコメントがあった。

また、A. Armour 氏から、「挿詩文」というより「包詩文」と考えた方がよいのではないかと意見が出され、発表者から、佐伯彰一氏からヨーロッパの散文のような硬い散文と、そうでない軟い散文にわけて考えたらどうかと示唆をいただいているが、もし軟い散文という風に考えると「包詩文」と考える方が適切ということもあるかも知れないと意見があった。

西氏からは、フリードリッヒ・シュレーゲルは、ゲーテのウイヘルム・マイスターを、詩と散文の混合の創設として、ローマン派の立場から、フランス革命、フィヒテの知識学と並ぶ18世紀の三大事件と述べているが、詩と散文の結合を、一つの基軸とするのは理解できるが、それだけを視点とするロマン派の見方に偏するおそれがあるのではないかとコメントがあった。

藤井貞和氏からは、インドのジャータカや仏典も挿詩文だと思われるが、これらを視野に入れた上で日本文学の特質と考えられるかと質問があり、漢訳仏典など視野に入れるべきだと思うが、886年の孟榮の『本事詩』の『伊勢物語』への影響などのほか、日本文学への影響をまだあまりはつきり把握していないと回答があった。

さらに秋山虔氏から、What でなく How の面から考えるとのことだが、あまり形態だけから考え過ぎているように思われる。文学の成立を考えると、散文と韻文と別々に成立するともいえないが、そのような成立の過程は問題にしないでよいのか、と質問があり、発表者から、今日は形態からのアプローチとして論じたが、社会的背景とか、形態の成立の源とかは今後の問題だと

思っていると回答があった。